

入学前期の内面的変化からみる介護学生の特徴

The characteristic of the care student judging
from an internal change of the earlier period of entrance to school

介護福祉学科共同研究

| | | | |
|-------------------------|----------------------|------------------------|-------------------------|
| 赤沢 昌子 Masako AKAZAWA | 尾台 安子 Yasuko ODAI | 合津 千香 Chika GOUZU | 丸山 順子 Junko MARUYAMA |
| 福田 明 Akira FUKUDA | 上延 麻耶 Maya UENOBE | 村山 くみ Kumi MURAYAMA | 小坂みづほ Mizuho KOSAKA |

〈要旨〉

介護福祉士養成の専門教育の中で求められるものの一つに対人援助技術がある。教員は介護学生に誰とでも交流することができる力を養っていく必要がある。入学して間もない1年次の前期は学生にとって大きな環境の変化があり、新しい人間関係を築く不安定な時期にあたるため、入学直後と前期終了時に実施したアンケートを分析し、学生の内面的変化から本学の学生の特徴を明らかにした。

学生の特徴としては、人間関係が広がってくる前期終了時においても対人関係に不安を抱いており、積極的に他者へ働きかけることをせず、親密な友人関係を形成することを避ける傾向にある。また、介護福祉士という専門教育を受ける中で、高校生活から大学生活への移行がスムーズに行われないうまま「できない」「わからない」が積み重なり大学生活における不適応を起こし、自分に自信が持てず消極的になってしまい、自尊心の低下を起こすことにつながっている。そこでこうした学生の特徴を理解した上で教員の個別的な関わりが重要になってくる。

〈キーワード〉

入学前期 内面的変化 介護学生の特徴

I はじめに

近年の介護福祉士養成に求められる専門教育では、対人援助職としてのコミュニケーション技術の重要性やチームケアを行うことから連携調整能力、人間としての尊厳を支えることができる高い倫理観、一人でも基本的な対応ができる能力、個別援助の実践力等が求められている。2年間という限られた期間の中で有効な人間教育を実践していくためには、介護を学ぶ意思を明確にもって学生が自分自身を振り返り変化させていくことが必要である。入学してから間もない1年次の前期は、学生にとって環境の変化もあり、新しい人間関係を築く時期でもあり、専門科目を学んでいくという学生生活の中では緊張感が強く、前期をどう乗り越えるかが大切になる。1年生の前期には、心身の一般的な不調として、「いつも疲れている」「なんとなく不安になることが多い」「一つのことが気になり始めると、他のことが手につかなくなる」ということが多いと大高他¹⁾は述べている。

このことの一つの要因には、授業時間が1コマ90分と高校での学習時間より長くなったことや入学直後から専門用語が並ぶ授業が開始すること等が考えられる。入学前期は、人間関係においても学生生活においても緊張感が強く、不安定な時期であることがいえる。そこで、基礎研究演習の時間を利用して、入学直後と前期終了時にアンケート調査を実施した。この入学後前期における学生の内面的変化を分析し、本学の介護学生の特徴を明らかにした。

II 研究目的

介護1年前期に於ける学生の内面的変化を分析し、学生の特徴を明らかにし、教員の関わりの方角性を考察する。

III 研究方法

1. 調査対象

基礎研究演習に参加している介護福祉学科1年生74名

2. 調査方法

1) 質問紙調査法

兎玉²⁾が「エンカウンター・グループ参加者の個人過程尺度」を参考に作成した「学生の変化に関する質問紙」の語尾を一部変更し、松浦他³⁾が作成した「Basic encounter group 効果測定尺度」を参考にし、それぞれ評定尺度を「もっともあてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」の4段階（換算点4：もっともあてはまる～1：まったくあてはまらない）にして使用する。

2) データ収集方法

基礎研究演習時第1回目の開始時（以後演習前とする）と第15回の終了時（以後演習後とする）に質問紙を配布、無記名にて実施し、記入後その場で自由回収し（周囲の人とまとめる・教員がいない教壇の箱まで持ってくる・質問紙を伏せておいて置くなど自由）退出する。

3. 調査期間

2007年4月10日基礎研究演習時と7月31日前期終了の基礎研究演習時に実施する。

4. 調査内容

「学生の変化に関する質問紙」；自己理解・他者理解・自然な自己表現・出会い欲求・自己拘束・人とのつながりの6つの構成要素から成り立つ22項目（以後「学生変化」とする）

「Basic encounter group 効果測定尺度」；内面の伝達・自己についての有意味感・人間関係についての自信・自己の一貫性・人間の受容に対する信頼の5つの構成要素からできている22項目（以後「効果」とする）

5. 言葉の操作上の定義

内面的変化とは、対人援助職として必要な自己理解・他者理解・自然な自己表現・出会い欲求・自己拘束・人とのつながり・内面の伝達・自己についての有意味感・人間関係についての自信・自己の一貫性・人間の受容に対する信頼等に対する自己の思いの違いを内面的変化とする。

6. 分析方法

演習前後においての変化・関係についてSPSS 11.0 for Windowsを用いて、尺度を2つ（「もっともあてはまる」「ややあてはまる」を「あてはまる」とし、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を「あてはまらない」とする）にし、各項目の差に対してはMann-

Whitney' s Utest を、各構成要素は逆転項目を直し総合平均にし、差に対して t・Ftest を行う。また各構成要素の関係については回帰分析を行う。その他については Excel を用いる。統計的有意水準は p 値が 0.05 以下とする。

7. 倫理的配慮

調査協力は自由であり、協力の有無や回答内容が学修に影響したり、成績に不利益を及ぼさないこと、得られた結果は本研究のみとし、他の目的では使用しないことを口頭及び文書にて説明し研究協力を求める。

IV 結果

回収率は演習前 94.6% (70 名)、演習後 98.6% (73 名) であった。

1. 演習前後での学生変化・効果項目の比較 (表 1)

1) 自己理解

自己理解は、「自分自身を見つめることは苦手」「日ごろの自分の姿勢や特徴に気づくことは難しい」「対人関係の持ち方について考えるのは苦手」「自分の問題ははっきりと自覚している」の 4 項目であり、演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

2) 他者理解

他者理解は、「人は表面からではうかがい知れない」「他人を内面から理解するのは難しい」「人の心の微妙なゆれは伝わりやすい」「話を聞かないと人の本当の姿はわからない」の 4 項目であり、演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

3) 自然自己表現

自然な自己表現は、「構えないで自分の考えや意見を言える」「日ごろ自分の考えを言える」「自分から話そうと思わない」の 3 項目であり、演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

4) 出会い欲求

出会い欲求は、「本当の私をみんなに知ってほしい」「私の感じていることをみんなにわかってほしい」「取り立てて私のことを知ってほしいとは思わない」の 3 項目である。その中で「取り立てて私のことを知ってほしいとは思わない」の項目では、演習前後で「あてはまる」と答えた学生の人数が 24 名 (34.3%) から 42 名 (58.3%) に増加し有意差が認められた。(P=0.004)

5) 自己拘束

自己拘束は、「自分を外に合わせるのは窮屈さを感じる」「自分で自分を縛っている」「自分を演じている」「私は素直にいられる」の 4 項目であり、演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

6) 人とのつながり

人とのつながりは、「他の人が自分を気にかけてくれている」「他の人たちに自分は支えられている」「悩んでいるのは自分だけでない」「一人で悩まなくてもいい」の 4 項目である。その中で「悩んでいるのは自分だけでない」の項目では、演習前後で「あてはまる」と答えた学生の人数は 32 名 (45.7%) から 50 名 (68.5%) に増加し有意差が認められた。(P=0.006)

7) 内面の伝達

内面の伝達は、「私の内面の不安や緊張を聞いてもらうことがある」「親しい人に内面のも

表1 演習前後の学生変化・効果の項目値

| 学生変化 | 自己理解 | | | 他者理解 | | | 自然な自己表現 | | | 出会う要求 | | | 自己制導 | | | 人とのつながり | | |
|--------------------|--------------|------------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | ① 気づく る要素 | ② 体験 し て く る こ と | ③ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ④ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑤ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑥ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑦ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑧ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑨ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑩ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑪ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑫ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑬ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑭ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑮ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑯ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑰ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑱ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と |
| あてはまる | 39 55.7 | 40 57.1 | 34 48.6 | 46 65.7 | 38 54.3 | 31 44.3 | 24 34.3 | 43 61.4 | 39 55.7 | 24 34.3 | 29 41.4 | 54 77.1 | 52 74.3 | 47 67.1 | 31 44.3 | 46 65.7 | 32 45.7 | 21 30.0 |
| あてはまらない | 31 44.3 | 30 42.9 | 36 51.4 | 24 34.3 | 32 45.7 | 38 54.3 | 46 65.7 | 27 38.6 | 30 42.9 | 46 65.7 | 40 57.1 | 18 25.9 | 23 32.9 | 39 55.7 | 23 32.9 | 23 32.9 | 38 54.3 | 49 70.0 |
| あてはまる | 39 54.2 | 49 67.1 | 34 46.6 | 49 67.1 | 41 56.2 | 38 52.1 | 41 56.2 | 35 47.9 | 34 47.2 | 43 58.9 | 31 42.5 | 22 30.1 | 23 31.5 | 38 52.1 | 37 52.1 | 52 71.2 | 50 68.5 | 26 35.6 |
| あてはまらない | 33 45.8 | 24 32.9 | 39 53.4 | 24 32.9 | 32 43.8 | 35 47.9 | 32 43.8 | 38 52.1 | 38 52.8 | 30 41.7 | 42 57.5 | 51 69.9 | 50 68.5 | 35 47.9 | 34 47.9 | 21 28.8 | 23 31.5 | 47 64.4 |
| 前-平均ランク | 72.34 | 68.36 | 72.73 | 71.49 | 69.54 | 71.71 | 69.99 | 71.31 | 70.63 | 62.84 | 71.34 | 68.3 | 69.89 | 77.51 | 68.22 | 69.83 | 63.69 | 69.95 |
| 後-平均ランク | 71.68 | 75.49 | 71.3 | 72.49 | 73.35 | 71.29 | 73.93 | 72.66 | 72.32 | 79.92 | 71.65 | 75.55 | 74.03 | 66.72 | 73.74 | 73.08 | 79.97 | 73.97 |
| Mann-WhitneyのU(両側) | 0.912 | 0.22 | 0.812 | 0.859 | 0.523 | 0.938 | 0.479 | 0.822 | 0.775 | *0.004 | 0.958 | 0.164 | 0.445 | 0.067 | 0.354 | 0.558 | *0.006 | 0.478 |

* p<0.05

| Basiccountergroup 効果測定尺度 | 内面の伝達 | | | 自己についての理解 | | | 人間関係についての目標 | | | 自己の責任 | | | 人間の受容性に対する理解 | | | | | | |
|-----------------------------|--|--|--|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---------|---------|---------|
| | ① 心 の 強 み を 認 め る こ と | ② 心 の 弱 み を 認 め る こ と | ③ 心 の 強 み を 認 め る こ と | ④ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑤ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑥ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑦ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑧ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑨ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑩ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑪ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑫ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑬ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑭ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | ⑮ 自分 の 強 み を 認 め る こ と | ⑯ 自分 の 弱 み を 認 め る こ と | | | |
| あてはまる | 30 42.9 | 39 55.7 | 30 42.9 | 42 60.9 | 40 57.1 | 42 60.9 | 31 44.3 | 50 72.5 | 44 63.8 | 34 49.3 | 22 31.9 | 46 66.7 | 35 50.0 | 27 39.1 | 38 54.3 | 31 44.9 | 45 64.3 | 38 55.9 | 29 42.6 |
| あてはまらない | 40 57.1 | 31 44.3 | 40 57.1 | 27 39.1 | 29 39.1 | 27 39.1 | 29 42.0 | 19 27.5 | 25 36.2 | 35 50.7 | 47 68.1 | 23 33.3 | 35 50.0 | 43 62.3 | 32 45.7 | 37 53.6 | 25 35.7 | 30 44.1 | 39 57.4 |
| あてはまる | 31 43.7 | 41 56.2 | 25 34.2 | 44 61.1 | 42 58.3 | 54 75.0 | 44 61.1 | 53 72.6 | 42 58.3 | 26 35.6 | 19 26.4 | 43 59.7 | 40 54.8 | 28 38.4 | 38 52.1 | 31 43.1 | 35 48.6 | 41 56.9 | 22 30.6 |
| あてはまらない | 40 56.3 | 32 43.8 | 48 65.8 | 28 38.9 | 30 41.7 | 18 25.0 | 34 46.6 | 20 27.4 | 47 64.4 | 30 41.7 | 53 73.6 | 29 40.3 | 33 45.2 | 45 61.6 | 34 46.6 | 41 56.9 | 37 51.4 | 31 43.1 | 50 69.4 |
| 前-平均ランク | 70.71 | 71.84 | 75.14 | 70.91 | 70.87 | 64.68 | 65.44 | 71.45 | 72.96 | 76.49 | 72.98 | 73.5 | 70.25 | 72.08 | 72.04 | 71.41 | 77.14 | 70.12 | 74.85 |
| 後-平均ランク | 71.28 | 72.16 | 68.99 | 71.08 | 71.13 | 76.00 | 75.43 | 71.55 | 66.79 | 69.13 | 68.6 | 73.68 | 71.92 | 70.97 | 69.64 | 66.01 | 70.86 | 70.86 | 66.39 |
| Mann-WhitneyのU(両側) | 0.923 | 0.957 | 0.292 | 0.977 | 0.985 | *0.042 | 0.176 | 0.985 | 0.51 | 0.101 | 0.474 | 0.395 | 0.567 | 0.979 | 0.858 | 0.764 | 0.061 | 0.90 | 0.139 |

* p<0.05

ろさを伝えられる」「親しい人に心の奥底を話せる」「親しい人に自分の気持ちを伝えるのが好き」「話し合うときは自分の考えを正直に言う」の5項目である。演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

8) 自己についての有意味感

自己についての有意味感は、「私にはよいところが少ししかない」「私は役に立たない人間だと思う」「私がうまくできることはほとんどない」「自分自身をよく理解できないときがある」「私の自信は揺らぎやすい」という5項目である。その中で「私にはよいところが少ししかない」の項目では、演習前後で「あてはまる」と答えた学生の人数は40名(58.8%)から54名(75.0%)($P=0.042$)、「私がうまくできることはほとんどない」の項目では31名(44.3%)から44名(61.1%)($P=0.045$)で有意差が認められた。

9) 人間関係についての自信

人間関係についての自信は、「ほとんどの場合私は人とうまくやっけていける」「人との付き合いで自分をうまくコントロールできる」「社会のいろいろな状況でうまくやっけていける自信がある」「人と仕事をするときは大体いつも協力的である」の4項目である。演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

10) 自己の一貫性

自己の一貫性は、「今までの自分でいようと思う」「今の私を大きく変えたくはない」「ひどい苦難が続いても私は変わらない」「自分の立場や状況が変わっても私は同じ」の4項目であり、演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

11) 人間の受容性に対する信頼

人間の受容性に対する信頼は、「周りの人たちは私に関心をもってくれている」「人前で話すとき人々は私に耳を傾けてくれる」「周りの人たちは私の言うことを受け入れてくれると思う」「周りの人たちは私と一緒に働くことがすきだと思う」の4項目であり、演習前後で比較してみるとすべての項目で有意差は認められなかった。

演習前後での学生変化・効果項目で有意に差があったのは4項目あり、「自分のことを知ってほしい」と思う学生が増え、「悩んでいるのは自分だけではない」ということに気づいてくる。また、「私には良いところが少ししかない」と、自分の良さを認めにくい傾向を表わしており、「自分がうまくできることはほとんどない」と自信のなさが現れている。

2. 演習前後の学生変化・効果の構成要素の比較(表2)

演習前後の学生変化・効果の構成要素11項目:自己理解・他者理解・自然な自己表現・出会い欲求・自己拘束・人とのつながり・内面の伝達・自己についての有意味感・人間関係についての自信・自己の一貫性・人間の受容に対する信頼について、演習前後得点の平均に有意差があったものは、「自己についての有意味感」のみであった。(演習前平均1.46・演習後平均1.35、 t 値2.19)

3. 学生変化・効果の構成要素間の関係(表3)

「自己理解」に有意に関係しているものは、他者理解(0.19)・自己についての有意味感(-0.30)・人間関係についての自信(-0.26)であった。自己についての有意味感と人間関係についての自信は負の強い関係が見られた($p < 0.001$)。

表2 演習前後の学生変化・効果の構成要素のt検定

| | 自己理解 | | 他者理解 | | 自然な自己表現 | | 出会い欲求 | | 自己拘束 | | 人とのつながり | | 内面の伝達 | | 自己についての 有意味感 | | 人間関係についての 自信 | | 自己の一貫性 | | 人間の受容性に対する 信頼 | |
|-----|-------|------|-------|------|---------|------|-------|------|-------|------|---------|------|-------|------|-----------------|------|-----------------|------|--------|------|------------------|------|
| | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 |
| 平均値 | 1.57 | 1.59 | 1.61 | 1.64 | 1.52 | 1.53 | 1.61 | 1.50 | 1.30 | 1.38 | 1.47 | 1.57 | 1.52 | 1.51 | 1.46 | 1.35 | 1.48 | 1.44 | 1.53 | 1.52 | 1.53 | 1.44 |
| t値 | -0.44 | | -0.64 | | -0.18 | | 1.69 | | -1.51 | | -1.83 | | 0.16 | | 2.19 * | | 0.85 | | 0.13 | | 0.13 | 1.40 |

* P<0.05

表3 学生変化・効果の構成要素の関係

| | 自己理解 | | 他者理解 | | 自然な自己表現 | | 出会い欲求 | | 自己拘束 | | 人とのつながり | | 内面の伝達 | | 自己についての 有意味感 | | 人間関係についての 自信 | | 自己の一貫性 | | 人間の受容性に対する 信頼 | |
|------------------|----------|---|---------|---|----------|---|---------|---|----------|---|---------|---|----------|---|-----------------|---|-----------------|---|---------|---|------------------|---|
| | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 |
| 自己理解 | | | 0.19 * | | -0.13 | | -0.02 | | 0.10 | | -0.05 | | 0.02 | | -0.30 ** | | -0.28 ** | | -0.11 | | | |
| 他者理解 | 0.18 * | | | | -0.05 | | -0.13 * | | -0.03 | | 0.10 | | 0.03 | | -0.15 | | -0.02 | | 0.20 ** | | | |
| 自然な自己表現 | -0.20 | | -0.08 | | | | 0.24 * | | -0.39 ** | | 0.30 * | | 0.61 ** | | 0.11 | | 0.48 ** | | 0.22 * | | | |
| 出会い欲求 | 0.03 | | -0.26 * | | 0.30 * | | | | -0.21 * | | 0.28 ** | | 0.34 * | | 0.11 | | 0.23 * | | 0.08 | | | |
| 自己拘束 | 0.13 | | -0.04 | | -0.31 ** | | -0.14 * | | | | -0.22 * | | -0.40 ** | | -0.23 * | | -0.26 * | | -0.10 | | | |
| 人とのつながり | 0.06 | | 0.13 | | 0.25 * | | 0.18 * | | -0.23 * | | | | 0.28 * | | 0.08 | | 0.29 * | | 0.11 | | | |
| 内面の伝達 | 0.02 | | 0.04 | | 0.50 ** | | 0.24 | | -0.42 ** | | 0.28 ** | | | | 0.12 | | 0.35 ** | | 0.12 | | | |
| 自己についての 有意味感 | -0.35 ** | | -0.02 | | 0.09 | | 0.07 | | -0.22 * | | 0.07 | | 0.03 | | | | 0.29 * | | 0.11 | | | |
| 人間関係についての 自信 | -0.33 ** | | 0.02 | | 0.38 ** | | 0.15 * | | -0.26 * | | 0.27 * | | 0.34 ** | | 0.30 * | | | | 0.35 ** | | | |
| 自己の一貫性 | -0.16 | | 0.29 * | | 0.21 * | | -0.06 | | -0.11 | | 0.12 | | 0.13 | | 0.13 | | 0.41 ** | | | | | |
| 人間の受容性に対する 信頼 | -0.13 | | -0.22 | | 0.40 ** | | 0.34 ** | | -0.36 ** | | 0.47 ** | | 0.41 ** | | 0.20 | | 0.52 ** | | 0.16 | | | |

* P<0.05 ** P<0.001

「他者理解」に有意に関係しているものは、自己理解 (0.18)・出会い欲求 (- 0.13)・自己の一貫性 (0.20)であった。出会い欲求は負の関係があり、自己の一貫性は関係が強く見られた ($p < 0.001$)。

「自然な自己表現」に有意に関係しているものは7項目あり、出会い欲求 (0.24)・自己拘束 (- 0.39)・人とのつながり (0.30)・内面の伝達 (0.61)・人間関係についての自信 (0.48)・自己の一貫性 (0.22)・人間の受容に対する信頼 (0.37)であった。自己拘束は負の強い関係であり、内面の伝達、人間関係についての自信、人間の受容性に対する信頼は強い関係が見られた ($p < 0.001$)。

「出会い欲求」に有意に関係しているものは7項目あり、他者理解 (- 0.26)・自然な自己表現 (0.30)・自己拘束 (- 0.21)・人とのつながり (0.28)・内面の伝達 (0.34)・人間関係についての自信 (0.23)・人間の受容に対する信頼 (0.39)であった。他者理解・自己拘束は負の関係で、人とのつながり・人間の受容性に対する信頼は強い関係が見られた。 ($p < 0.001$)。

「自己拘束」に有意に関係しているものは7項目あり、自然な自己表現 (- 0.31)・出会い欲求 (- 0.14)・人とのつながり (- 0.22)・内面の伝達 (- 0.40)・自己についての有意味感 (- 0.23)・人間関係についての自信 (- 0.26)・人間の受容に対する信頼 (- 0.26)であり7項目とも負の関係であった。また自然な自己表現、内面の伝達、人間の受容性に対する信頼は強い関係が見られた。 ($p < 0.001$) 「人とのつながり」に有意に関係しているものは6項目あり、自然な自己表現 (0.25)・出会い欲求 (0.18)・自己拘束 (- 0.23)・内面の伝達 (0.28)・人間関係についての自信 (0.29)・人間の受容に対する信頼 (0.35)であった。自己拘束は負の関係で、人間の受容性に対する信頼は強い関係が見られた。 ($p < 0.001$)。

「内面の伝達」に有意に関係しているものは5項目あり、自然な自己表現 (0.50)・自己拘束 (- 0.42)・人とのつながり (0.28)・人間関係についての自信 (0.35)・人間の受容に対する信頼 (0.32)であった。5項目すべて強い関係が見られ、自己拘束のみ負の関係であった。 ($p < 0.001$)

「自己についての有意味感」に有意に関係しているものは3項目あり、自己理解 (- 0.35)・自己拘束 (- 0.22)・人間関係についての自信 (0.29)であった。自己理解と自己拘束は負の関係で、自己理解は強い関係が見られた。 ($p < 0.001$)。

「人間関係についての自信」に有意に関係しているものは最も多く9項目あり、自己理解 (- 0.33)・自然な自己表現 (0.38)・出会い欲求 (0.15)・自己拘束 (- 0.26)・人とのつながり (0.27)・内面の伝達 (0.34)・自己についての有意味感 (0.30)・自己の一貫性 (0.35)・人間の受容に対する信頼 (0.40)であった。自己理解・自己拘束は負の関係であり、自己理解、自然な自己表現、内面の伝達、自己の一貫性、人間の受容に対する信頼は強い関係が見られた。 ($p < 0.001$)。

「自己の一貫性」に有意に関係しているものは3項目あり、他者理解 (0.29)、自然な自己表現 (0.21)、人間関係についての自信 (0.41)であった。人間関係についての自信は強い関係が見られた。 ($p < 0.001$)。

「人間の受容性に対する信頼」に有意に関係しているものは6項目あり、自然な自己表現 (0.40)、出会い欲求 (0.34)、自己拘束 (- 0.36)、人とのつながり (0.47)、内面の伝達 (0.41)、人間関係についての自信 (0.52)であった。6項目すべて強い関係がみられ、自己拘束は負の関係であった。 ($p < 0.001$)。

学生変化・効果の構成要素間の関係でもっとも強い関係になったものは次の通りである。

「自己理解」と「自己についての有意味感」、「自然な自己表現」と「内面の伝達」ではお互い強い関係になった。「他者理解」は「自己の一貫性」、「出会い欲求」・「人とのつながり」・「人間関係についての自信」は「人間の受容に対する信頼」、「自己拘束」は「内面の伝達」、「自己の一貫性」・「人間の受容に対する信頼」は「人間関係についての自信」が強い関係であった。

V 考察

本研究は、1年次前期における学生の内面的変化を調査した結果にもとづいて、本学学生の特徴を明らかとしたものである。その結果、「出会い欲求」の「取り立てて私のことを知ってほしいとは思わない」、「人とのつながり」の「悩んでいるのは自分だけではない」、「自己についての有意味感」の「私にはよいところが少ししかない」、「私がうまくできることはほとんどない」の4項目において有意差を確認した。このことから本学学生の特徴と教員の関わりの方角性について考察する。

1. 対人関係不安の影響

入学から4ヶ月が経過し友人関係がある程度形成されつつある段階において「取り立てて私のことを知ってほしいとは思わない」と回答した学生が有意に増えたことは「現代的友人関係」を志向する学生の増加を意味していると考えられる。現代的友人関係とは「内面的友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけあわないよう、表面的に円滑な関係を志向する」⁴⁾ものとされている。本来、「青年期は他の年代以上に、友人とのかかわりを希求し、自己の安定や成長に関連づける」時期であり、特に青年後期にあたる大学時代には、「相手との信頼・自己開示・相手への忠誠に基づいた親密で有意義な友人関係が維持されている」⁵⁾時期である。しかし、「取り立てて私のことを知ってほしいとは思わない」と回答した学生たちは積極的に他者へ働きかけることをせず、親密な友人関係を形成することを避ける傾向にあるといえる。有意差は見られなかった他者理解の「他人を内面から知るの難しい」は、入学後4ヶ月経過して「あてはまる」と回答している数が半減している。このことは学生同士の交流が進み他者の内面を知ることができ、悩んでいるのは自分だけではないことを知ることにつながる。しかし、自分自身については取り立てて知ってほしいとは思っていないことから、さらに深い関わりを持つていないことが伺い知れる。人間関係形成については消極的になってしまい、親密なかかわりを持つておかない傾向を表わしている。これは、他者から何か言われるのではないかと、否定的な態度や感情を示されるのではないかとという対人不安が影響していると考えられる⁶⁾。

2. 大学生活への不適応

対人不安がある反面「悩んでいるのは自分だけではない」に示されるように他者と自己を比較している側面も見受けられる。これは、自己認識欲求の表れだと考えられる。そして、この自己認識の方法として自分と他者との行動や特性を比較する社会的比較があり、本学学生においても無意識に社会的比較を用いていると考えられる。上瀬⁷⁾によれば自己認識欲求は、自己概念が不安定な場合に強く喚起され、自己概念の不安定さは他者との関係を重視する日本人の自己のあり方と関連することが明らかにされている。相互依存的自己理解は、自己概念不安定を介して自己認識欲求が喚起されるとしている。

本研究においても「私にはよいところが少ししかない」「私がうまくできることはほとんどない」の項目にみられるように「自己についての有意味感」が優位に低下しており、このことが自己認識欲求を高めていると考えられる。また「私にはよいところが少ししかない」「私がうまくできることはほとんどない」の項目が優位に低下した背景には、授業時間が1コマ90分と高校での学習時間より長くなったことや2年間で専門的な知識や技術を学ぶため、入学直後より専門用語が並ぶ授業が開始され、十分に理解されないままになっている¹⁾ことが影響していると考えられる。つまり、

高校生活から大学生活への移行がスムーズに行われないうまま「できない」「わからない」が積み重なり大学生活における不適応を起こしているのだと考えることができる。

また、社会的環境に不適応を示す学生の特長として対人関係をうまくこなすための技術である社会的スキルをそれまでの人生で十分に学んでこなかったことや人生のどこかの時期で不適切な対人反応を身に付けてしまっていると考えられており⁸⁾、「現代的友人関係」を志向する要因の一つだと考えられる。このような不適応状態を示す学生に対し適切な支援を行わないまま放置することは不必要な退学・休学者を生み出すことに繋がるのである⁹⁾。

3. 自信のなさからくる自尊心の低下

「自己についての有意味感」の中の2項目で学生の人数が有意に増えた。また、この有意味感については演習前後の構成要素のt検定でも有意差が認められている。看護者の自己理解の特徴には、自尊心の低下、抑圧、自責の念があり、自己概念を揺さぶられる体験であり、自尊心が損なわれた人は患者でなくても相互的な対人関係を結ぶことはできないと井上は¹⁰⁾述べている。「私にはよいところが少ししかない」「私がうまくできることはほとんどない」は自尊心の低下と考えることができる。同じ対人援助職である介護福祉士を目指す学生も、同様の傾向を示しており、相互的な対人関係を結ぶことができなくなると考えられる。この自信のなさは、不適応のところで述べているように、専門職資格をとるための知識や技術を学ぶので、入学直後より専門用語が並ぶ授業が開始され、十分に理解されないままになっている¹⁾ことから影響を受けていると考えられる。今までの高校生活の延長ではできないという部分が介護福祉士の専門教育には出てくる。そのことに対して、できない自分・わからない自分が目につき自己の過小評価につながるのではないかと考える。前期終了時において学生生活には慣れて交友関係も広がってきてはいるが、学生の自信のなさからくる自尊心の低下に対して十分な配慮が必要である。

4. 教員の役割

2年間という短い短大生活においては、早くに学生生活に慣れ、交友関係を広げ充実したものにしていけるようにする必要がある。その中で本研究において、前期終了時の学生は、対人不安を抱えており、親密な友人関係を形成することを避けてしまっていることが明らかになった。このことが学生生活の不適応状態を引き起こすことにもつながる。そこで相手との信頼関係を築くために自己開示をしながら交友関係を深めていく必要がある。学生の個別性も考慮しながら一人ひとりの特性を見極めながら、教員がまず学生との信頼関係を築くことで、不適応状態を回避できるのではないかと考える。そして、不必要な休学・退学者を出さない努力をしていかなければならない。講義の中では一人ひとりを観ていくことは出来ないため、少人数での基礎研究演習としてのゼミ体制の中で、まずは教員との関わりを深めていくことが必要である。

本学の学生は介護福祉士という対人援助職を目指す学生である。そのため、対人不安を軽減し他者との関係が柔軟に形成できるようゼミ活動や講義等に生活体験を組み入れ社会的スキルを学ばせるための工夫も必要となる。また学生間の親密で有意義な交流が図れるよう教員は時期と状況を判断し、学生の情動を揺さぶるような関わりが求められる。さらに、「自己についての有意味感」を持てるよう「あなたにはこんな良いところがある」「こんなに上手にできた」など、学生一人ひとりの存在価値を認めた関わりが強く求められる。

また、大学生活への適応を促すための導入教育の強化が急務となる。専門教育を2年間で行わな

けれどもならないが、高校生活から大学生活への移行がスムーズに行われているかを把握し、生活指導に生かしていかなければならない。講義においては専門用語や専門科目の授業内容については学生が理解出来るように配慮をしていくことが求められる。

おわりに

人間関係においても、学生生活においても緊張感が強く、不安定な1年次の半年間で学生はどのように変化するのかという視点でアンケート調査を行った。その結果、学生の特性としては、「悩むのは自分だけではない」と人とのつながりは増加したが、自己についての有意味感が減少していることが明らかになった。このことは新しい人間関係、介護の専門科目などによって、できない自分・わからない自分・自信がない自己を理解した結果ではないかと考えられる。今までは、入学初期の段階から前期までを教員は集中的にサポートしていたが、後期に入っても学生が自信を持てるような、自己に対して有意味感をもてるような意図的な関わりが必要である。また時期を見定め、学内外を問わず、できるだけ会話の機会を設け、学生同士の情報交換ができるよう、またその会話にも苦手意識を持たせないように、個別性にも充分配慮し、協力ができるような日ごろの関わりをしていく必要がある。

引用文献

- 1) 大高恵美他：学生生活チェックカタログを用いた学生生活の実態調査 日本赤十字秋田短期大学紀要 第7号 2002 p 39～44
- 2) 児玉龍治：介護福祉士養成教育におけるグループワーク体験による学生の変化に関する研究 中央法規出版株式会社 介護福祉教育 No23. 第12巻第2号 2007. 3 p 65～72
- 3) 松浦光和他：ベーシック・エンカウンター・グループの効果を測定する尺度の作成— 3名のファクシリーテーターの経験に基づいて— 仙台白百合女子大学紀要 9 2005
- 4) 岡田努：大学生における友人関係の類型と、適応及び自己の諸側面の発達の関連について パーソナリティ研究 第15巻 第2号 2007 p 135～148.
- 5) 岡田努：現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究 第5号 1993 p 43～55.
- 6) 原田絵美子：継続型構成的エンカウンター・グループにおける自己開示の効果に関する研究 九州大学心理学研究 第7号 2006 p 159～167.
- 7) 上瀬由美子他：自己認識欲求喚起と自己情報収集行動の心理的背景— 青年期を対象として— 教育心理学研究 第43巻 第1号 1995 p 23～31
- 8) 樋口康彦：生徒指導が極めて困難な事例の研究 国際教養学部紀要 第1巻 2005 p 27～36
- 9) 山田ゆかり：大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要 第6号 2006 p 29～36
- 10) 井上聡子：精神看護実習に求められる教授活動のあり方-実習終了時の質問紙による学生評価から- 川崎市立看護短期大学紀要 第8巻 第1号 2003 p 11～20